

看護学生と看護師の全体的自己価値の検討

A Study on the Total Self-Worth of Nurses and Students in Nursing School

山本 ちか
Chika YAMAMOTO

本研究の目的は、看護学生と看護師の全体的自己価値の様相を検討することである。分析の結果、全体的自己価値の得点については、看護学生と看護師の間に、ほとんどの項目で差がみられなかった。全体的自己価値の感じ方に違いはみられないようである。全体的自己価値と具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度の関連の仕方については、看護学生では、身体的外見の自己評価がもっとも全体的自己価値に影響していた。看護師は身体的外見の自己評価ではなく重要度が全体的自己価値に影響しており、仕事での自己評価が全体的自己価値に最も影響しているようである。

キーワード：全体的自己価値、具体的側面の自己評価、看護師、看護学生

total self-worth, domain-specific self-evaluation, nurses, students in nursing school

【目的】

全体的自己価値とは、自分自身についての評価的感情であり、例えば自分のことが好きであるのか、自分に満足しているのかといった自分自身全体について肯定的に評価しているのかの程度を示すものである。こうした全体的自己価値について、看護学校に在学している学生と、現在働いている看護師は、どのような様相を呈しているのだろうか。

青年期は自己像の再構築の時期であるといわれ、自己を否定的に評価する傾向があるという指摘が多くみられる（特に女子）。看護学生については大部分の学生が青年期であり、就学を終了し看護師として働いた経験があり自己が安定してきていると考えられる看護師とでは、全体的自己価値の様相は大きく異なるだろう。

本研究では、看護学生と看護師は自分自身について肯定的に評価しているのか、それとも否定的に評価しているのかを比較検討する。

また自分自身全体についての評価である全体的自己価値とは別に、自分自身のより具体的な側面についての評価についてもとりあげ、全体的自己価値にはどのような側面の自己評価が関連しているかを検討する。

具体的な側面としては、学生にとって重要であると思われる「身体的外見」の自己評価、「スポーツ能力」の自己評価、「知的能力」の自己評価をとりあげる。看護師については、「身体的外見」の自己評価、「運動能力」の自己評価、「仕事能力」の自己評価をとりあげる。

また一方で、具体的側面の自己評価そのものよりも、具体的側面について自分がどれだけ重要だと思っているか（例えば、外見をどれだけ重要だと思っているかなど）が、自分自身全体に対する自己評価である全体的自己価値に関連するのではないかという指摘も見られる。そこで、本研究では、具体的側面についての自己評価が全体的自己価値に影響しているのか、それとも具体的側面を重要だと思っていることがより全体的自己価値に影響を与えているのかを検討する。

本研究の目的をまとめると以下のとおりである。

1. 全体的自己価値および具体的側面の自己評価について、看護学生と看護師に差がみられるかどうかを検討する。
2. 全体的自己価値と具体的側面の自己評価はどのように関連しているのかを検討する。
3. 全体的自己価値により強く影響するのは、具体的

側面の自己評価であるのか、それとも具体的側面の重要度であるのかを検討する。

【方法】

1. 調査内容

a. 全体的自己価値：

自分に満足しているか、自分が好きであるかなど自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定（非常にあてはまる～非常にあてはまらない）でたずねた。Harter(1988)の“Manual for the Self-perception Profile for Adolescence”の中の全体的自己価値についての項目、DuBois(1996)のSelf-Esteem Questionnaire、Rosenbergの自尊感情尺度（日本語訳は山本・松井・山成,1982を参考にした）を参考に5項目を作成した。これら5項目について高得点ほど肯定的に評価しているように合計得点を算出した。

b. 具体的な側面の自己評価：

身体的外見、スポーツ能力（看護学生）・運動能力（看護師）、知的能力（看護学生）、仕事能力（看護師）についてどのように評価しているのかをたずねた（13項目）。項目は、全体的自己価値と同様に、Harter(1988)の“Manual for the Self-perception Profile for Adolescence”の項目、DuBois(1996)のSelf-Esteem Questionnaireの項目を参考に作成し、6段階評定（非常にあてはまる～非常にあてはまらない）でたずねた。

身体的外見は、自分の外見に満足しているかどうか、好きであるかどうかについてである。スポーツ能力（看護学生）は、自分のスポーツ能力をどのように評価しているかをたずねた。看護師にはスポーツだけでなく、体力や運動能力をどのように評価しているかをたずねた（運動能力）。知的能力（看護学生）は、頭のよさや勉強の能力をどのように評価しているか、仕事能力は、自分の仕事能力をどのように評価しているかである。それぞれの側面について、高得点ほど肯定的に評価しているように合計得点を算出した。

Table1 全体的自己価値の平均値 (M),標準偏差 (SD)

	看護学生		看護師	
	M	SD	M	SD
今の自分自身に満足している	2.97	(1.25)	3.24	(1.04)
今の自分が好きである	3.42	(1.43)	3.52	(1.07)
時々自分がだめな人間だと思う	4.34	(1.35)	3.98	(1.13)
時々自分のことがいやになる	4.44	(1.19)	3.94	(0.93)
私はもっと自分に自信がもてたらいいなと思う	4.63	(1.32)	4.49	(1.19)

c. 具体的な側面の重要度：

「外見がどうであるか」、「スポーツができるかどうか」、「頭がよいかどうか」、「仕事」が自分にとってどれくらい重要であるのかを6段階評定（非常にあてはまる～非常にあてはまらない）でたずねた。

2. 調査実施時期と実施方法

調査は、2004年6月に、看護学校の学生については授業時間中に、看護師については講習会の際に集団で実施した。なお調査実施時には、調査は強制ではないこと、記入したくなければ記入しなくてもよいことを伝えた。

3. 調査協力者

調査は、愛知県の看護師の講習会に参加した看護師49名と、愛知県内の看護学校に在籍する学生64名に実施した。看護師の平均年齢は、35.8歳（範囲：28歳～45歳）、看護学生の平均年齢は、19.5歳（範囲：18歳～31歳）であった。また、看護師としての平均経験年数は、12.9年（範囲：6年～24年）であった。

【結果および考察】

1. 全体的自己価値および具体的側面の自己評価についての、平均値、標準偏差および看護学生と看護師の比較

a. 全体的自己価値 全体的自己価値の各項目について、平均値、標準偏差をTable1に示した。看護学生、看護師ともにネガティブな項目についての得点が高く、自分自身について否定的に評価していると考えられる。次に、看護学生と看護師の得点に差がみられるかどうかを検討するためにt検定を行った。その結果、「時々自分のことがいやになる」1項目のみに有意差が見られた (Fig.1)。看護師よりも看護学生の方が自分

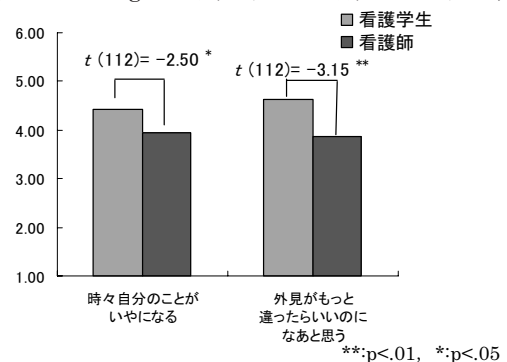


Fig.1 t検定の結果

Table2 具体的側面の自己評価の平均値 (M), 標準偏差 (SD)

	看護学生		看護師	
	M	SD	M	SD
自分の顔が気に入っている	2.83	(1.16)	3.04	(1.01)
今の自分の見た目に満足している	2.58	(1.19)	2.96	(1.05)
外見がもっと違ったらいいのになあと思う	4.63	(1.18)	3.88	(1.35)
自分の体重は今のままで十分だと思っている	2.64	(1.54)	2.82	(1.52)
自分の身長は今のままで十分だと思っている	3.48	(1.48)	3.88	(1.44)
初めてするスポーツでもうまくなる自信がある	3.44	(1.51)	-	-
いろいろなスポーツがうまでき、満足している	3.08	(1.41)	-	-
スポーツの大会では選手に選ばれる方である	3.05	(1.72)	-	-
スポーツがもっとうまできたいのになあと思う	4.70	(1.34)	-	-
体力に自信がある	-	-	3.92	(1.07)
いろいろなスポーツがうまでき、満足している	-	-	2.82	(1.19)
運動神経がいい方だと思う	-	-	3.30	(1.20)
自分は健康だと思う	-	-	4.26	(1.01)
勉強がとてよくできると思う	2.47	(1.04)	-	-
頭がよい方だと思う	2.86	(1.05)	-	-
わからないことが多くて、課題をなかなか終わらせられない	3.91	(1.23)	-	-
授業中に学んだことをすぐ忘れる	4.08	(0.93)	-	-
仕事では誰にも負けぬ自信がある	-	-	2.98	(1.08)
今の自分の仕事に満足している	-	-	3.74	(1.24)
自分の仕事に自信をもっている	-	-	3.84	(1.04)
あまり仕事の成果があがらない	-	-	3.32	(1.00)

をいやだと思う程度が高いようである。

b. 具体的側面の自己評価

具体的側面の自己評価について、側面ごとの平均値、標準偏差を Table2 に示した。また看護学生と看護師に同一項目でたずねた外見の自己評価については、t 検定を行った。その結果、「外見がもっと違ったらいいのになあと思う」1項目のみに有意差が見られた (Fig.1)。看護学生の方がより、自分の外見についての変化を望んでいるようである。

2. 全体的自己価値と具体的側面の自己評価の関連

a. 看護学生

全体的自己価値5項目の α 係数は .79 であった。身体的外見の自己評価4項目の α 係数は .75、スポーツ能力の自己評価4項目の α 係数は .85、知的能力の自己評価4項目の α 係数は .80 であった。いずれも十分な値であ

るといえる。

全体的自己価値に影響を与えているのはどの側面の自己評価であるのかを検討するため、全体的自己価値を従属変数とし、身体的外見、スポーツ能力、知的能力の自己評価を説明変数とする重回帰分析を Amos を用いて行った。まず3つの説明変数間のすべてに共分散を仮定したモデルを検討し、共分散が有意でなかったものを削除して再度分析を行った。相関係数は Table3 に示し、モデルの推定結果を Fig.2 に示した。モデルの適合度は、 $\chi^2=2.58(p=.28)$, AGFI=.90, CFI=.98, RMSEA=.07 であった。また R^2 は .33 であった。外見の自己評価は、最も全体的自己価値に関連しており (標準化係数=.44, $p<.001$)、次いで知的能力の自己評価が関連していた (標準化係数=.26,

Table3 相関係数 (看護学生)

	全体的自己価値	身体的外見	運動能力	知的能力
全体的自己価値	-			
身体的外見	.53 ***	-		
スポーツ能力	.22	.19	-	
知的能力	.41 **	.33 **	.34 **	-

***: $p<.001$, **: $p<.01$

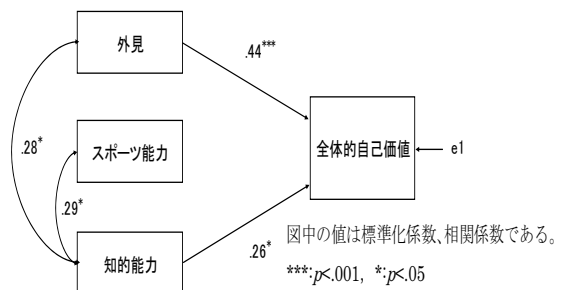


Fig.2 重回帰分析の結果 (看護学生)

Table4 相関係数（看護師）

	全体的自己価値	身体的外見	運動能力	仕事能力
全体的自己価値	-			
身体的外見	.49 ***	-		
運動能力	.50 ***	.24	-	
仕事能力	.71 ***	.47 **	.46 **	-

***:p<.001, **:p<.01

p<.05). スポーツ能力の自己評価は関連していなかった。

b. 看護師

全体的自己価値5項目のα係数は.87であった。身体的外見の自己評価4項目のα係数は.77, 運動能力の自己評価4項目のα係数は.71, 仕事能力の自己評価4項目のα係数は.70であった。いずれも十分な値であるといえる。

全体的自己価値に影響を与えているのはどの側面の自己評価なのかを検討するため、全体的自己価値を従属変数とし、身体的外見, 運動能力, 仕事能力の自己評価を説明変数とする重回帰分析をAmosを用いて行った。まず3つの説明変数間のすべてに共分散を仮定したモデルを検討し、共分散が有意でなかったものを削除して再度分析を行った。相関係数はTable4に示し、モデルの推定結果をFig.3に示した。モデルの適合度は、 $\chi^2=6.11(p=.05)$, AGFI=.72, CFI=.93, RMSEA=.21であった。モデルのあてはまりは、あまりよくないようである。またR²は.52であった。仕事能力についての自己評価は、最も全体的自己価値に関連しており(標準化係数=.60, p<.001), 次いで運動能力の自己評価が関連していた(標準化係数=.22, p<.05)。身体的外見の自己評価は関連していなかった。

3. 具体的側面の重要度の平均値, 標準偏差

外見がどうか, スポーツができるかどうか, 頭がよいかどうか, 仕事が、自分にとってどれくらい

Table5 具体的側面の重要度の平均値(M), 標準偏差(SD)

	看護学生		看護師	
	M	SD	M	SD
外見がどうか	4.59	(0.89)	4.08	(1.10)
スポーツができるかどうか	3.91	(1.42)	3.32	(1.06)
仕事	5.09	(0.97)	5.02	(0.74)
頭がよいかどうか	4.27	(1.06)	4.46	(0.97)

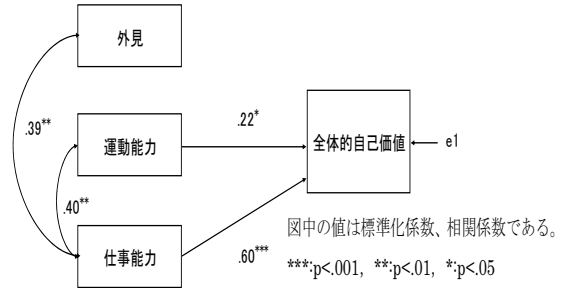


Fig.3 重回帰分析の結果（看護師）

重要であるのかといった重要度について、平均値, 標準偏差を算出した (Table5)。そして、看護学生と看護師で重要度に差がみられるかどうかを検討するためt検定を行った。その結果、外見についての重要度と、スポーツの重要度に有意差がみられた (Fig.4)。いずれも看護学生の方が重要だと考えているようである。

4. 全体的自己価値と具体的側面の自己評価, および具体的側面の重要度の関連

a. 看護学生

看護学生の全体的自己価値に影響を与えているのは、具体的側面の自己評価であるのか、それとも具体的側面の重要度なのかを検討するため、全体的自己価値を従属変数とし、身体的外見, スポーツ能力, 知的能力の自己評価と、外見, スポーツ, 知的能力についての重要度を説明変数とする共分散構造分析をAmosを用いて行った。各具体的側面の重要度から各側面の自己評価へのパスも仮定し、自己評価の側面間、重要度の側面間に共分散を仮定したモデルを検討した。そしてパスや共分散が有意でなかったものを削除して再度分析を行った。最終的なモデルの推定結果をFig.5に示した。

モデルの適合度は、 $\chi^2=10.35(p=.41)$, AGFI=.88,

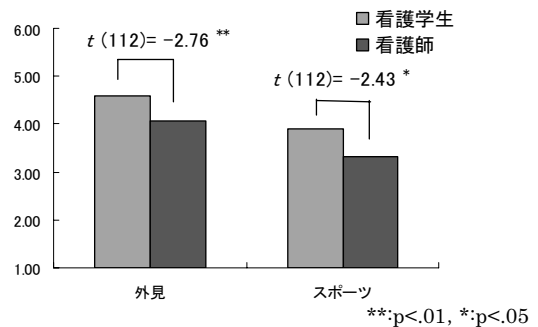


Fig.4 t検定の結果

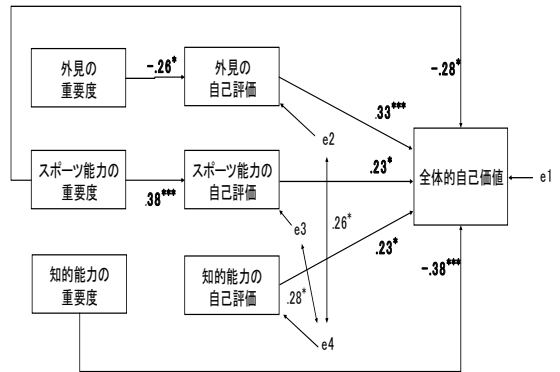
CFI=.99, RMSEA=.02であった。モデルのあてはまりは、よいと考えられる。外見については、重要度から自己評価へのパスの標準化係数は $-.26(p<.05)$ であり、自己評価から全体的自己価値へのパスが $.33(p<.001)$ であった。外見を重要だと感じていることが外見の否定的な自己評価に影響しており、外見の自己評価の高さが全体的自己価値の高さに影響しているようである。スポーツ能力については、重要度から自己評価へのパスの標準化係数は $.38(p<.001)$ であり、自己評価から全体的自己価値へのパスは $.23(p<.05)$ であり、重要度から全体的自己価値へのパスは $-.28(p<.01)$ であった。スポーツ能力を重要だと感じていることはスポーツ能力の肯定的な自己評価に影響しており、自己評価の高さが全体的自己価値に影響しているようである。また知的能力については自己評価から全体的自己価値へのパスの標準化係数は $.23(p<.05)$ 、重要度から自己評価へのパスは $.28(p<.05)$ 、重要度から自己評価へのパスは有意ではなかった。知的能力を重要だと感じていることは全体的自己価値の低さに影響しており、知的能力の肯定的な自己評価は全体的自己価値の高さに影響していると考えられる。

b. 看護師

看護師の全体的自己価値に影響を与えているのは、具体的側面の自己評価であるのか、具体的側面の重要度なのかを検討するため、全体的自己価値を従属変数とし、身体的外見、スポーツ能力、仕事能力の自己評価と、外見、スポーツ、仕事のついでに重要度を説明変数とする共分散構造分析をAmosを用いて行った。まず、各具体的側面の重要度から各側面の自己評価へのパスも仮定し、自己評価の側面間、重要度の側面間に共分散を仮定したモデルを検討し、パスや共分散が有意でなかったものを削除して再度分析を行った。最終的なモデルの推定結果をFig.6に示した。

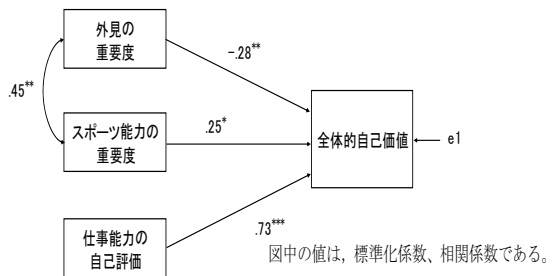
モデルの適合度は、 $\chi^2=1.33(p=.52)$, AGFI=.93, CFI=1.00, RMSEA=.00であった。モデルのあてはまりはとてよいようである。仕事能力についての自己評価は、最も全体的自己価値に関連しており（標準化係数 $=.73, p<.001$ ）、仕事能力の重要度から全体的自己価値へのパスは有意ではなかった。外見と運動能力については、自己評価は全体的自己価値に関連しておらず、外見とスポーツの重要度が全体的自己価値に関連していた。外見の重要度から全体的自己価値へのパスは標準化係数が $-.28(p<.01)$ であり、外見を重要だ

と考えているほど、全体的自己価値が低いと考えられる。スポーツの重要度から全体的自己価値へのパスは標準化係数が $.25(p<.05)$ であり、スポーツを重要だと考えているほど全体的自己価値が高いと考えられる。



図中の値は、標準化係数である。
e1からe4は誤差を示す。誤差間の値は相関係数。
***:p<.001, *:p<.05

Fig.5 最終的なモデルの推定結果（看護学生）



図中の値は、標準化係数、相関係数である。
***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05

Fig.6 最終的なモデルの推定結果（看護師）

5. まとめ

本研究の目的は、看護学生と看護師の全体的自己価値の様相を検討することであった。分析の結果、全体的自己価値の得点については、看護学生と看護師の間に、ほとんどの項目で差がみられなかった。全体的自己価値の感じ方に違いはみられないようである。

全体的自己価値と具体的側面の関連の仕方については、看護学生では、身体的外見がもっとも全体的自己価値に影響している。一方看護師は身体的外見の自己評価は全く影響していない。それよりも仕事での自己

評価が高いことが全体的自己価値の高さにつながっているようである。

また、全体的自己価値と具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度との関連については、看護学生では、外見を重要だと感じていることが外見の否定的な自己評価に影響しており、外見の自己評価の高さが全体的自己価値の高さに影響しているようである。一方スポーツを重要だと感じていることは全体的自己価値の高さに影響している。また知的能力は、重要度と自己評価のそれぞれが全体的自己価値に影響していると考えられる。

看護師では、外見の自己評価や運動能力の自己評価が全体的自己価値に影響するのではなく、外見を重要だと感じていることが全体的自己価値の低さに影響しており、スポーツを重要だと感じていることが全体的自己価値の高さに影響している。外見を重要だと感じていることとスポーツを重要だと感じていることでは、全体的自己価値に与える影響が異なるようである。また仕事については重要だと感じているかよりも、仕事についてどれだけ肯定的に評価しているかが最も全体的自己価値に影響しているようである。

【文献】

- 1) DuBois,DL, Felner,RD, Brand,S, Phillips,RSC, & Lease,AM Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. *Journal of Research on Adolescence*, **6**, 543-579 (1996).
- 2) Harter,S, The Self-Perception Profile for Adolescents. Unpublished manual, University of Denver, Denver, CO, (1988).
- 3) Rosenberg, M, Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ, Princeton University Press, (1965).
- 4) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造, *教育心理学研究*, **30**, 64-69 (1982).

【付記】

本調査の実施にあたり、看護学校での調査を担当していただいた稲葉小由紀氏（現：神戸学院大学）、看護師の調査にご協力いただきました看護学生の皆さん、看護師の皆さんに心より感謝いたします。